



交易港・大連の一九二五年

「一九二五年中国東北部で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察
：視聴化された満蒙」(2008)

稲賀 繁美

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授)

竹村民郎氏は1929年生まれだから、1925年といえば生誕4年前の事績となる。『大正文化』の研究に先鞭をつけると同時に、『廃娯運動』に先駆的な業績のある著者にとっては、「大連廃娯事始め」の延長として、この昭和元年の大連における勸業博に探測の触手を伸ばすには、ある種の必然もあった。博覧会という切り口から見れば、1903年に大阪を舞台に開かれた「第五回内国勸業博覧会とレジャー産業」を題材に「マス・レジャーの形成と大衆娯楽の諸相」を分析してきた著者にとって、大連博は、その20年後の様相を吟味する機会となる。のみならず『帝国主義と兵器生産』に経済史家として斬り込んできた著者にとって、30年代以降の満洲の経営論は、高橋是清の財政政策から、俗に「ニキ三スケ」といわれた満洲国経済政策の隠された実態解明に向かうなかでも、その前哨戦の位置をしめる。そこで焦点となるのが、大連勸業博覧会だった。

大連市は1924年7月に市街を拡大し、21万の人口を数えるに至った。新市制実施にともない、市会議員定員40名のうち半数が民選とされた。この新市会で物産共進会開設の意見書が提出され、準備わずか1年半あまりで実現に漕ぎ着けたのが、大連勸業博覧会だった。20年遡る大阪の第五回勸業博覧会が準備に3年以上を費やしたのに比べれば、拙速は免れない。だが大豆の生産量もこの20年ほどで推定60万トンから270万トンへと5倍近い増産を見ており、貿易も明治40年に5200万海関両だったものが、大正14年には5億4700万海関両と、飛躍的な拡大を見ていた。関東大震災後の復興途上で不景気に見舞われた内地とは対照的に、満蒙の玄関口であった港湾都市、大連には、商工会議所を中心に、飛躍に向けた機運が醸成されようとしていた。

*

『笑楽の系譜』(1996)『大正文化：帝国のユートピア』(2004)の著作をもつ筆者は、大連勸業博覧会にも、観光の歴史におけるひとつの画期と、ラジオ放送の先駆性とを確認する。一方で『満洲日日新聞』8月7日は満鉄のダイヤ改正とともに、2本の夜行で一等寝台車に婦人用洗面所が設けられ、大連-長春間にも三等寝台車が導入される予定と報じている。この区間は、従来よりも2時間半短縮して17時間で結ばれるようになった。他方、東京放送局が放送を開始したのは、米国での世界最初の放送開始から5年後の1925年7月。満洲ではそれに続いて8月9日には放送を開始した。竹村論文は放送に関する「事前検閲」についても、『満洲日日新聞』8月15日付から記事を拾っている。さらに、満鉄初代総裁・後藤新平を総裁に頂く満蒙文化協会による活動写真上映も、陸軍省から援助を受け、勸業博覧会を期に隆盛を迎える様子が実証された。

**

大連勸業博覧会が開催された昭和初年から、日本の敗戦に至る20年間。この時期の歴史記述には、なお複数のベクトルが競合している。まず、地理上の変更。敗戦後、日本列島とその周辺へと領土を縮小した日本の自己認識からみれば、大連とその奥に広がる中国東北部は、無謀なる海外膨張の負の記憶を宿した土地でしかない。当時、大連だけでも20万を超す日本人人口があり、満洲国成立後、36年には、100万戸の移民計画が提唱された。日本敗戦時点で100万人を超えていた人口のうち、引き揚げで家族を失った経験をもつ移民、シベリアに抑留された60万人を超える開拓団棄民や旧将兵、満洲国崩壊後、現地で留用された技術者、さらには残留孤児となった人々も多い。だが『満洲泰阜村一七十年の歴史と記憶』が明らかにされたのは近年のこと。現在の日本史の「正史」記述からは、この広大な偽「満洲国」の事績は、なお除外されているに等しい。

経済史や交通運輸の歴史も、断絶されたままといいよ。大連から北に延びる南満州鉄道のみならず、華北の鉄道経営にも莫大な投資がなされた。開発には現地の満人や中国人に過酷で無法な強制的使役がなされ、多くの犠牲者を出した。韓半島の安東より奉天へと延びる安奉線を経由して、朝鮮からも多くの入植者が農民として移住した。長春郊外の萬峰山で発生した朝鮮入植者と地元中国人との水争いに武装警官が介入した事件が飛び火して、平壤では中国系商店が略奪される虐殺事件が発生する(万峰山事件)。こうした満洲国当時の移民・植民のの名の土地強奪に絡む事件は枚挙に暇ない。

帰属意識といえば、当時大連や満洲に生活していた移民には、日系、朝鮮系を問わず、満洲の故地に郷愁を覚える人々も少なくない。だが敗戦後70年を迎え、成年で当時を体験した生存者も90代を迎えようとしている。大連勸業博覧会の会場を肌身で知る体験者は、もう何人と残ってはいない。当時の大連では、内地・東京の中学や高等学校に負けない生徒や学生を育てようと競争心を煽る教育が熱心になされた。偽「満洲国」建国後の新京の建国大学は、内地の旧帝国大学や、台北大学、京城大学などと進学率を競う最高学府となった。北朝鮮と国境を接する延辺朝鮮族自治区では、1992年の中韓国交回復ののち、朝鮮系の若者たちが、ソウルへと大量に出稼ぎに向かう傾向が著しい。

人的流動において、廃娼運動の対象となった女性労働者の実態は無視できない。この分野でも竹村氏の業績は先駆的だが、その背景には満洲移民に先立つ東南アジアへの、いわゆる「唐行きさん」の動向についての氏の関心も裏打ちされている。九州も天草地域、隠れキリシタンを輩出した歴史的背景を背負った交易の土地は、女性の人身売買や商売目的の渡航においても、特異な地域であり、「供給地」や「積み出し港」も特定できる。明治以降の日本の海外植民地の展開は、売春業者による遊郭の発展とも切り離せない。事の性質上、きちんとした統計が残りにくい事跡だが、中国沿岸部から東南アジア各地への女性の出稼ぎや現地への同化の有様は、シンガポールの無縁墓地をはじめとして、行路沿線各地にその痕跡が残されている。朝鮮や北方アジアも例外ではない。

こうしてみると、竹村民郎氏の大連勸業博覧会への関心の裏には、従来の研究が見落としがちだった多くの伏線が錯綜していることが見えてくる。現在の国境にそった国別の政治史、社会史、経済史、文化史、あるいは交易史ではかえって脱落してしまう交渉の実態。それへの氏の一貫した姿勢が、日本の大陸への進出の出先基地となった、遼東半島先端の港湾都市への注目のうちにも、如実に見て取れる。帝国史、植民都市史、女性史、移民史、文化交流史といった新領域へと次の世代を誘いながらも、そうした切り分けによって裁断しては、いやおうなく捨象されかねない生身の人間の営みに、著者は親密に寄り添おうとする。そこには敗戦後ほどなく、占領下から脱したばかりの日本にあって「職場の歴史をつく

る会」に参与した竹村氏の姿勢が、貫かれている¹⁾。

翻れば、『満洲日日新聞』の分析は、中国から来日した留学生によって、今さらに深められようとしている。そのひとり、栄元さんの研究では、中国人や満人に人気のあった富籤の運用がいかに大連で実施されたかが検討されている²⁾。また日本からの朝鮮半島や遼東半島への修学旅行の盛行についても、王莞晴さんが博士論文を完成間近である。20世紀の万国博覧会や勸業博覧会はアジアの視点からの見直しを要請されているが、これについては国際日本文化研究センターでも佐野真由子氏による共同研究会が成果を世に問おうとしている。また満洲国の文化史的研究についても、韓国の韓錫政氏を中心に研究会運営がすすんでいる。朝鮮半島を含めた満蒙の鉄道網と物資や人的資源の輸送についても、李容相、井村哲郎ほか中韓日の研究者の共同作業が軌道に乗ろうとしており、その傍らで鉄道の敷設が、それまで不可能だった資源の利用可能性を拓き、満蒙地域の近代化にいかにつなげたのかの具体的な仕組みも、ようやく解明されはじめた。満洲の沃野の大豆を輸送するには、安奉線経由で、鴨緑江流域の広葉樹森林資源が奉天以北に輸送される必要があり、それらの木材が鉄道の枕木と、冬季の物資輸送のための巨大な馬車の荷台に使われた。必要とされた荷馬はモンゴルから無尽蔵に供給された。これらの要素の連結が満洲に「離陸」そして「暴走」を約束した³⁾。金融史の研究でも、満洲国での決済に横浜正金銀行がいかに参与し、とりわけ戦時経済下でいかに担保のない紙幣を増発して戦費に充てていたかの絡構が見えてきた。満洲国における重工業化の進展も、帝国体制下の日本の工業発展史には不可欠な視点だが、これについても、軍需産業の分析を含めて、竹村氏には確たる史料裏付けに基づく見識がある。台湾の中央研究院での会合で、林満紅氏を前に、その詳細を即興に披露される様に、評者は驚嘆した経験がある⁴⁾。

現今の金融暴走は、はたして満洲暴走の二の舞なのか。竹村民郎の××やいかに？

1 「検証『国民の歴史学』運動—『職場の歴史』をつくる運動に関連して」（書き下ろし）『著作集』第Ⅴ巻

2 「租借地都市大連における『満洲日日新聞』の役割に関する一考察—「大連彩票」の内容分析から—」『文化科学研究』2014年、45-69頁。

3 安富歩、深尾洋子『「満洲」の成立』名古屋大学出版会、2009年。

4 郭南燕（編）『世界の日本研究』2014年版、所収拙稿を参照。